

祝★キューバ革命 64 周年



CUBAPON 会員の皆さん、あけましておめでとうございます。
1 月 1 日、キューバ革命 64 周年を迎えました。
米国の経済封鎖をはじめ多くの困難を乗り越え連帯と国際主義
の見本を世界に示しているキューバと連帯し、今年もキューバに
大いに学んでいきましょう！



ラミレス大使より歓迎のご挨拶（上）



会場の雰囲気（右）

キューバへの熱い想いを持ち寄って



第 7 回全国キューバ友好の集い」開かれる

11 月 30 日、キューバ大使館において「第 7 回全国キューバ友好の集い」が開催され、CUBAPON から 4 人（鎌田さん、齋藤さん、根岸さん、村上さん）が参加しました。

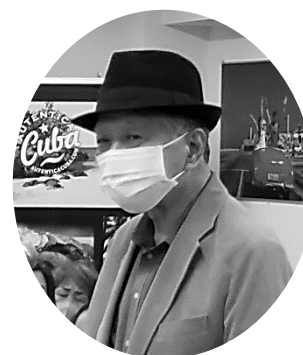
集いは、最初にキューバ革命の指導者フィデル・カストロ元議長の逝去 6 周年を記念して、ドキュメンタリー、「私たちの中にいるフィデル」が上映されました。

続いて、ラミレス・キューバ大使の歓迎挨拶のあと、キューバと連帯する友好団体や個人から、連帯運動の報告やキューバに寄せる思いなど、様々な角度からの発言がありました。

CUBAPON から鎌田事務局長より青年の島の日系人との草の根交流を中心に活動の報告をしました。

キューバは昨年、大きな事故や自然災害が相次ぎました。そうした中でも医療、教育の基本的な無料制度を維持し、引き続く北の巨人の圧力の中で主権と独立を維持しているキューバへの熱い連帯の想いを新たに「集い」となりました。

その後、とモヒート、ラム酒がふるまわれ、キューバ料理をつまみながら大使館のメンバーと参加者同士、なごやかに懇親を深めました。



鎌田事務局長より CUBAPON の活動報告

感動再び！

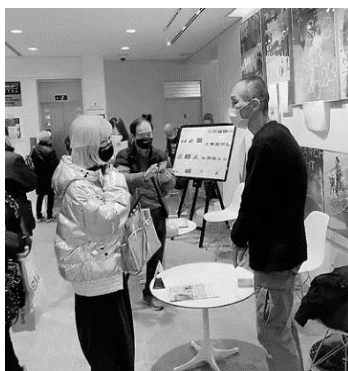
『そしてイスラの土となる～日系キューバ移民の記録』
一映画祭で上映される

12 月 10 日から 23 日、新宿 K's Cinema で開催された東京ドキュメンタリー映画祭で『そしてイスラの土となる～日系キューバ移民の記録』（製作：IFCC 国際友好文化センター、協力：CUBAPON）が 12 月 10 日、20 日に上映されました。

この映画は、CUBAPON 会員だった故・日高邦夫さんの遺志を引き継ぎ、CUBAPON が仕上げる資金を呼び掛けて調達、映像作家・鈴木伊織さんが完成にこぎつけたものです。

1910 年代以降、多くの日本人移民が、サトウキビ農園労働者としてキューバに渡り、第二次大戦中の強制収容、キューバ革命などをのりこえ、激動の 20 世紀を懸命に生き抜いてきました。この映画では「最後の日系キューバ移民一世」といわれた島津三郎さんをはじめ、日系二世の人々が、異郷の島（イスラ）から故郷日本への思いを語っています。

島津三郎さんの 108 歳での死で、キューバの移民一世はイスラの土となりました。キューバをはじめ中南米へ多くの日本人が「夢」をみて海を渡った移民たちの意志は様々ですが、歴史的には帝国主義日本による「棄民」（作家・石川達三）でした。（K）



観客に挨拶する監督の鈴木伊織さん(右)

30 年前から“今”を考える

——キューバを想う——

1992 年 2 月 28 日

IFCC 国際友好文化センター事務局長

鎌田 篤 則

(一) 3 回目のキューバ訪問へ

キューバを訪れる機会をえた。私にとっては 3 回目の訪問であった。1978 年の世界青年学祭典・ハバナ祭典（平和友好祭の世界版）が最初の訪問で、2 回目の訪問が 1985 年のモスクワ祭典の準備会議のためであったせいか、反帝国主義の旗手としてのキューバへの想いは特別なものがあつた。

今回の訪問は、日本からキューバへのツーリストを拡大するための調査が目的で、キューバ共産主義青年同盟（UJC）と旅行社（EMPRESA CAMPISMO POPULAR）の招待のかたちで行った。

ご承知のように、キューバの経済的な困難は彼ら自身否定しないように大変厳しいものがある。ソ連や社会主義東欧諸国との交易が大きな比重を占めていたこと、砂糖、コーヒーなど一次産品がその中心的なものであったことなどから、コメコン体制の崩壊、依然としてとして拡大している“南北格差”などの今日の情勢は重くキューバに被いかぶさっている。しかし、なによりも本質的でかつ決定的な要因は、アメリカによる経済封鎖である。この点にはよく錯誤され易いが肝心なことである。

現在の状況から脱出するに一挙とはいかない。特に産業構造の改造は設備投資に要する多くの資金を必要とし、その成果もただちに現れるものではない。そこで、キューバが今もっとも力を入れているのが“観光”である。比較的廉価な投資で直接外貨収入に直結するからである。昨年度から既に主要輸出品の砂糖収入を上回る外貨収入を上げるまでになっている。

そこで、日本からの観光客誘致、拡大を求めているわけである。彼らは「キューバへの連帯は大変ありがたい。それには、なによりも観光客が多く来てくれることが助かる」と言う。宣伝じみでくるが、キューバは観光ずれしていない農業国で、物足りないかもしれないが、そこがまた観光地としての魅力となっている。かつてアメリカの支配下で観光地であったこともあり、“世界一美しい”といわれるバラデロ海岸など手付かずのプライベートビーチが自然のまま残っており、文豪ヘミングウェイが遊んだ跡もたどれる。とにかく“碧い海、美しい海岸、自然の野山”は急ぎ足でない旅を満喫させてくれる。なによりも、キューバ人の底抜けに明るい気質が心地よく、美しい思いにしてくれるが、それはラテン特有としてのみでは語れない。総じて豊かさは感じないが、ドロップアウトしたスラム街はなく、慎ましく平均的な生活のなせることなのかもしれない。

(二) マイアミ・ルート開拓へトライしたが

キューバは、日本からすると北半球にあるとはいえ、ちょうど地球の反対側になり、とてつもなく遠い感じがするし、実際遠い。しかし、アメリカのマイアミがあるフロリダ半島から 145 キロメートルのあるといえば“そう遠くないナ”という気がしてくる。

・8 月（2022 年）CUBAPON の事務所を移転したが、その作業中、1992 年キューバ訪問時のレポートを掲載した小冊子がみつかった。この訪問の記憶はもちろんあるがレポートのことは失念していた。

・人類史は戦争という争いの歴史で、その克服を目指し到達したものが「民主主義だ」といわれる。「全体主義の『社会主義』も凌駕した」とも——

・だが、“今”の姿はどうであろうか、30 年前のキューバ・レポートから考えた。（鎌田）

今回のキューバ訪問は、キューバへどうやって最短距離でかつ最低の料金でたどり着くかというルートの調査も目的のひとつであったので、マイアミから飛んでいるチャーター便が利用できたらと考えトライしてみた。マイアミからツーリストがキューバを訪問するにはアメリカの法律がネックとなった。アメリカ政府はビジネスとか公用のビザで出国することは限られた範囲で認めているが、ツーリスト・ビザでの出国は認めていない（外国人であっても）。

マイアミに行って初めて、アメリカとキューバのホットな関係を目の当たりにした。マイアミには亡命者を中心に約 100 万くらいものキューバ人がおり、市長もキューバ人である。また、日常の会話やマスコミの用語もスペイン語が大半を占めている。アメリカの社会構図の一つの断面を見た思いであった。政治的にはキューバに対する「ショーウィンドウ」の位置をもっており、かつての東ドイツに対する西ベルリンの位置と似通っている。マスコミで流されるニュースの約半分近くが、キューバに関するものと思われるほど身近で、かつホットである。ちょうど、亡命キューバ人グループが武器も秘密裏に準備し、キューバに潜入、内外呼応して攪乱を図った事件があった直後だった。3 人の首謀者は逮捕され、キューバの法廷で死刑を宣告されたが、マイアミ滞在中はそのニュースでもちきりであった。キューバの島の東端にあるアメリカ軍のグアンタナモ基地（以外と知られていないが、革命前の政権がアメリカに売却し、今なおアメリカが租借地として居座っている）周辺や、マイアミでの亡命キューバ人のデなどを連日流していた。アメリカが「喉仏に刺さったトゲ」と称し執拗に抹殺を謀ってきたことから解るように、対峙させられたキューバの困難は想像以上のものと考えられる。

話が、少々飛ぶが、アメリカは東欧、ソ連の“崩壊”をチャンスとみてキューバへのありとあらゆる経済封鎖と政治的圧力を強めているが、一方でこれに対する非難も強まっている。特にヨーロッパではタンカーを送るためにフランス共産党が提唱した“キューバに船を”キャンペーンがイギリス、ドイツ、デンマーク、イタリア、ルクセンブルク、ポルトガル、スウェーデン、スイス、そしてキプロスと広がりを見せている。また、ベネズエラ、メキシコなどは石油供給を申し出、イギリスは、アメリカが通商法「改正」によって海外子会社のキューバとの取引を禁止しようとする政策に拒否を打ち出すなど、キューバを軸とした動きも急である。

(三) メキシコでホセ・マルティに会う

キューバ行はやむなくメキシコからのルートに変えた。帰路、再びメキシコシティに滞在した時、我々はおもしろいものに出会

った。今時珍しい、“鎌とハンマー”のマークの赤旗に出会い、やじ馬の我々は、早速見に行った。市内の公園の一角にそれはあったが、ホセ・マルティ・センターの前であった。キューバでは“独立の父”と呼ばれ（キューバの首都、ハバナの革命広場にホセ・マルティの像が建てられている）、アメリカの前のスペインの占領下で独立闘争を闘った詩人で、革命家である。彼は、キューバ人のみならず、かつてスペインからの独立解放闘争で血塗られた犠牲の歴史を共通に持つラテンアメリカの人々からも尊敬の念を抱かれている。ハバナを発つ日（1月28日）がホセ・マルティの記念日（生誕日）であることは、ハバナ市内の催しの準備で知っていたが、メキシコシティでこのようにオープンに祝されているとは驚きであった。そこにはホセ・マルティの銅像があり、花輪をささげられた彼が抱えるように“キューバ万歳、社会主義は資本主義に勝つ”という看板が掲げられていた。また、その横にはゲバラの写真も飾られていた。

平然たる装いで、また一つの風景として、ホセ・マルティを記念するセンターや銅像、そして、ゲバラや“鎌とハンマー”が存在しているのを見るにつけ、マイアミで出会った風景との落差に、3カ国の政治的なトライアングルを見た思いであった。

ソ連・東欧の社会主義体制は確かに崩れ去った。しかし、その脈絡のみではキューバは語れないとつくづく思った。科学についての社会主義思想の検証は今後あったとしても、「依然として拡大している収奪と貧困の下で日々の生活を強いられている人々の存在と、片方（僅か数カ国）に集中している富の存在があるかぎり、絶え間なく、生存をかけた抵抗運動があり続けるであろう。そうであるかぎり、それを勇気づけ鼓舞し、なによりも歴史の中の正当なるものとして、支える科学＝社会主義思想の再生もあり続けるであろう。社会主義運動をみても、我々はあまりにもヨーロッパ指向であったことを反省させられる。中南米では、チリのアジェンデ政権（社会主義体制ではないが、それを指向した政権）に象徴されるように、1917年のロシア革命以来、幾度となく社会主義を指向した政権が登場しては消え、それを繰り返して来ている。時としてそれは“国家社会主義”の装いをもったり、キリスト教の“解放の神学”であったりするが、根幹は生存闘争としての性格である。資本主義下の労働者運動の在り様もまた同じでなかろうか。

（四）マリアの涙で想う

キューバでの滞在は予定より短く4泊しかできなかったが、今後のツーリスト派遣に関する豊富な成果を持ち帰ることができた。北半球で1月は日本と同じく冬だが、日中は平均25度ぐらいで晴天30度近くになる常夏である。ガソリン不足は切符制をみても一目瞭然だがトラックなど輸送車の空車をチェックポイントで停車させ、相互扶助の精神で利用者に便宜を図っている。観光資源についても同様だが、持てるものでいかに生活を工夫、向上させるか、努力の跡がうかがえる。ハバナから離れた農村部の方が食べ物も豊富なようだし、食べ物や酒、そして建物など地場で取れるものを上手に利用している。

ハバナでは、過去2回の訪問で果たせなかった、ヘミングウェイも常連だったレストランに行けて幸運だった。“フロリディータ”でダイキリを、“ボデギータ”でモヒートを堪能し味わった。それぞれラム酒ベースのカクテルだが、私には特にモヒートが最

高の味であった。

そういう気持ちが芳醇になるキューバ体験をしたわけだが、方や沸々たる気持ちになる体験にも出会う。

もう14年前になるが、ハバナ祭典の時出会ったマリアをよく思い出す。彼女は、当時のアンゴラに義勇軍として出掛けた恋人から半年も音信が途絶えていると言って涙を浮かべていた。“インターナショナルナリスタ”（キューバでは困っていたり、請われたりしたら、どこへでも出掛け帝国主義者と闘う闘士のことをこう呼ぶ）として彼も出掛けたのだという。キューバ人は黒人との混血で“ムラート”と呼ばれる人が80%に及ぶ。また、“キューバ人はキューバ革命に参加した人のこと”とキューバ人の概念を彼らは言う。そのせいか、アメリカ帝国主義が育んだのか、アルゼンチン人でキューバ革命に貢献し、ボリビアで倒れた傑出した革命家エルネスト・チェ・ゲバラの生き様も一つの象徴だろうか。

“青春の島”と呼ばれるピノス島では、中南米やアフリカから、戦火や内戦で孤児となった子供達が引き取られ学んでいる。また、かつてのニカラグアへも識字教育や保健医療のため多くのキューバ人が馳せ参じた。これらに携わる人々もすべて“インターナショナルナリスタ”と呼ばれる。ただ、その真骨頂は、そうした援助、支援を通してのものというより“キューバは、ラテンアメリカ独立のかけがえのない生命線”として、元ニカラグア・サンディニスタ政府内務相がいう「...多くの援助、支援を受けたからではなく...キューバはラテンアメリカの尊厳を代表している、という事実こそわれわれがキューバ人に感謝する理由である」との言葉こそ本質的なものかもしれない。

決して物質的には豊かでない彼らの人間的な豊かさを想う。その想いはマリアの涙と二重写しになり、思い出す度に胸の奥底からいつも滾るものを感じる。

以上

※ 明らかな誤植以外は原文のままとした。小見出しのタイトルを追加した。（2022/12/26）

TOUR OPERATOR

アイエフシーは
CUBAPON 関連の手配旅行社です
キューバをあなたに届けます

◆アイエフシーはIFCC 国際友好文化センターの関連旅行社です。人と人との出会いを通して友好・交流のプログラムを演出します。

◆アイエフシーは文化、政治、福祉、環境分野の視察・研修・調査のプログラムをお手伝いします。

◆アイエフシーはキューバなど中南米、ベトナム・中国などアジア、ドイツなど西欧、デンマークなど北欧の訪問プログラムを提供します。

東京都知事登録旅行業第 3-3757 号

〒162-0801

東京都新宿区山吹町 316 番地 菊地ハイツ 101

TEL03-3268-6014 FAX03-3268-6079

Email: ifc@trio.plala.or.jp



今、中南米では

中南米情勢が緊迫しています。
CUBAPON はキューバ連帯の旗
を掲げると同様に、中南米の人民の
闘いと状況を発信します。



ペルー「クーデター」一連の流れ

- 12月6日 ・カスティージョから国民へのメッセージ-民主主義を尊重し、議会における「罷免プロセス」と対決すると約束
- 7日 ・「恒常的な道徳的無能力」を理由に大統領罷免を求める動議を議会が準備
・(正午)ペドロ・カスティージョ、テレビ会見、「議会閉鎖」「司法権力と国家検察の再編」「9ヶ月以内の憲法制定議会招集」を発表、7日午後10時から外出禁止令を発令
・同時刻、政権の元高官、議会査察委員会で、受け取った賄賂の一部をカスティージョに渡したとする証言を行う
・閣僚の辞任相次ぐ
・軍がカスティージョの「議会閉鎖」に不支持を表明
・カスティージョ、罷免、逮捕。ディナ・ボルアルテ副大統領が大統領に就任
- 8日 ・メキシコがカスティージョの亡命受け入れを表明、リマのメキシコ大使館包囲される
- 9日 ・カスティージョ、暗殺の恐れを訴え、赤十字の介入を求める
・カスティージョ支持者による抗議行動(1日目)
- 10日 ・抗議活動によりリマ空港閉鎖
- 11日 ・抗議行動で初の犠牲者(15歳と18歳の少年が死亡)。少女を含む負傷者がでる
・死傷者が出たことで議会紛糾、抗議行動支持に転じる議員も現れ、議会内で暴力沙汰
・ペルー・リブレ党、リマで抗議集会開催
・農業組合、先住民・農民組織、13日以降「無期限ストライキ」を発表
- 13日 ・収監中のカスティージョが「辞任しない」との書簡を発表

12月25日現在、弾圧による死者26人

ペルーでクーデター 背後に米国の影

12月7日、ペルーでクーデターが起き、中南米「左派躍進」の一角であったカスティージョ政権が事実上、倒れました。

当初、ラテンアメリカの知識人の間では「クーデターだ」という意見と「議会閉鎖しようとしたカスティージョのクーデターが阻止されたのだ」という意見に分かれていましたが、CIAのエージェントを9年間勤めた経歴を持つ駐ペルー



リサ・ケナ米国大使(左)とボルアルテ



ケナ米国大使(左)とボッピオ国防相

ー米国大使リサ・ケナがクーデター前日(12月6日)にペルー国防相ボッピオと会談していたこと、カスティージョ排除に向けた軍と米国の「速やかな」連携が明らかになるにつれ、米国に支援されたクーデターであることがはっきりしてきました。

クーデターは許さない！—中南米の声

メキシコ、アルゼンチン、コロンビア、ボリビアは、ペルー国民によって民主的に選ばれた大統領であるカスティージョを支持する共同声明を発表しました。このほか、ベネズエラ、キューバ、ホンジュラスなど、少なくとも14カ国がクーデターを批判し、ボルアルテ政権を認めないことを表明しています。

一方、『選挙で選ばれていないクーデター政権』を支持しているのは米国・カナダの他、ウルグアイ、エクアドル、コスタリカの保守政権、それに断末魔のボルソナロ極右政権(ブラジル)、そして残念ながらチリ「左派」政権もこちらに名を連ねています。

尚、ペルーのメディアは富裕層にすべて握られているので、現地の情報を含めメディアが伝えることがすべて正しい情報とは限りません。

今後とも注視していかなければなりません。

紛争から見えてきた世界と中南米の今

ウクライナ紛争

●「ナチス賞賛を禁じる決議」を巡る国際社会の深淵

2021年12月11日、「ナチス、ネオナチ賞賛を禁じる決議」が国連で採択され、《米国とウクライナ》の2か国だけが反対、49カ国が棄権しました。主に「西側諸国」です。

2022年12月16日、同じ決議が採択に付され、驚いたことに、50カ国が反対しました。反対した国のリスト（右表参照）には、日本はもとより、ナチス賞賛を憲法で禁じているドイツまでが名を連ねています。

決議の内容は全く同じですが、昨年と今年、変わったのは「ウクライナ紛争の勃発」です。ウクライナを支援する「西側諸国」は、ウクライナを美化するついでに、かの国と分かちがたい存在であるナチスを受け入れたということでしょうか。

●ラテンアメリカは「ナチス賞賛」を認めない！

こうした中、一つの希望はラテンアメリカです。米国から相当な圧力があつたと思われるですが、エクアドルとパナマが棄権した以外、すべての国が「ナチス、ネオナチ賞賛を禁じる」ことに賛成しました。「もう米国の裏庭ではない！」と胸を張るラテンアメリカの姿をここに見ることができます。

●ミンスク合意の「罨」

ミンスク合意とは、2014年に始まったウクライナ東部紛争を巡る和平合意で、ロシアとウクライナ、ドイツ、フランスの首脳が15年2月にまとめたもので、ロシアはこの枠組みでロシア系住民が多く住むウクライナ東部ドンバス地方の安定を図ろうとしました。

しかし、合意は履行されず、8年で14,000人という多くの命が失われました。

一方、最近、この合意の当事者であった3人—当時のウクライナ大統領ポロシェンコ、ドイツ首相メルケル、フランス大統領オランドから驚くべき証言が相次いで飛び出しました。



【ポロシェンコ】：「ミンスク合意」は、ウクライナ軍を整備し、経済を再建して、NATOとともにウクライナ軍を訓練してNATO規格で東ヨーロッパ最強の軍隊に仕立てるため、少なくとも4、5年、時間を稼ぐために必要だった。（11月18日）



【メルケル】：「ミンスク合意」はウクライナに時間を与えるための試みだった。彼らはこの時間を使って強くなり、それは今日見ることができる。2014年から15年のウクライナは、今日のウクライナではない。NATO諸国がウクライナを支援するために現在行っているのと同じくらい多くのことをその時できたとはとても思えない。（12月10日、「DIE ZEIT 紙」のインタビュー）



【オランド】：メルケルが言ったことは正しい。2014年以来、ウクライナは軍事態勢を強化してきた。ウクライナ軍は2014年とはまったく異なり、訓練され装備されている。これは、ウクライナ軍にこの機会を与えたミンスク合意のメリットだ。（12月28日、「キエフインディペンデント紙」が掲載）

和平合意にサインした4人の首脳のうち3人が「あれは軍備強化の時間稼ぎだった」と明らかにしたことをもってしても、「他国への軍事侵攻」を正当化するのは難しいでしょう。しかし、「麦畑と青空が広がる平和な国に突然、狂暴なクマが襲いかかった」というストーリーは事実と反する上、強烈な世論誘導が疑われます。

日本では、ウクライナ紛争を突破口に、軍事費を1.5倍にしようという論議が進んでいます。メディアの嘘と隠ぺい、それがどういう意図で行われているのか、今こそ「見抜く力」が問われている気がしてなりません。

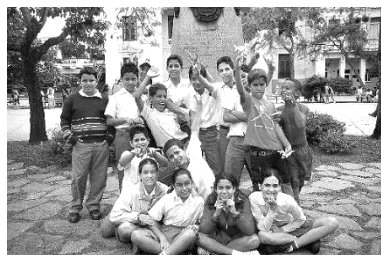
●反対した 50 カ国

アルバニア
アンドラ
オーストラリア
オーストリア
ベルギー
ボスニアヘルツェゴビナ
ブルガリア
カナダ
クロアチア
キプロス
チェコ
デンマーク
エストニア
フィンランド
フランス
ジョージア
ドイツ
ギリシャ
ハンガリー
アイスランド
かけられたアイルランド
イタリア
日本
キリバス
ラトビア
リベリア
リヒテンシュタイン
リトアニア
ルクセンブルク
マルタ
マーシャル諸島
ミクロネシア
モナコ
モンテネグロ
オランダ
ニュージーランド
北マケドニア
ノルウェー
ポーランド
ポルトガル
モルドバ
ルーマニア
サンマリノ
スロバキア
スロベニア
スペイン
スウェーデン
ウクライナ
イギリス
アメリカ

●棄権した 10 カ国

アフガニスタン
エクアドル
ミャンマー
パプアニューギニア
トルコ
パラオ
パナマ
韓国
サモア
スイス

4年ぶりのキューバへ！



青年の島の子どもたち

コロナ禍で中断を余儀なくされた「CUBAPON 友好訪問団」ですが、今年春、「4年ぶりのキューバ」をめざして動き始めました！

通貨統一とともに進む経済改革、米国の60年以上にわたる経済封鎖に抗し、フィデル・カストロが掲げた医療と教育を守り、生き抜くために奮闘するキューバをぜひ体感してください！



フィデル・カストロセンター

CUBAPON キューバ友好訪問団【5月3日～11日】(予定)

	都市名	スケジュール	食 事
1	成田発 メキシコシティ着	午後：アエロメヒコで空路、メキシコシティへ 【メキシコシティ泊】	朝：× 昼：× 夕：機
2	メキシコシティ ハバナ	午前：アエロメヒコで空路、ハバナへ 午後：ハバナ着、ホテルへチェックイン 【ハバナ泊】	朝：○ 昼：× 夕：○
3	ハバナ 青年の島	早朝、空路、青年の島へ 午前：小学校、中学校見学 午後：診療所見学 【青年の島泊】	朝：○ 昼：○ 夕：○
4	青年の島	午前：友好の家訪問、日系人の皆さんと交流 午後：フィデル、ラウルが収監された「モデロ監獄」見学 【青年の島泊】	朝：○ 昼：○ 夕：○
5	青年の島 ハバナ	早朝：空路ハバナへ 午前・午後：【世界遺産】ハバナ旧市街とモロ要塞 【ハバナ泊】	朝：○ 昼：○ 夕：○
6	ハバナ	午前：近年オープンしたフィデル・カストロセンター見学 午後：友好協会・労働組合中央本部表敬訪問 【ハバナ泊】	朝：○ 昼：○ 夕：○
7	ハバナ メキシコシティ	午前：ショッピング 午後：「老人と海」の舞台コヒマル、ヘミングウェイ博物館見学 夕方：空路、メキシコシティ（トランジット）空路、成田へ 【機内泊】	朝：○ 昼：○ 夕：×
8	機内		朝：機 昼：機 夕：機
9	成田着	午後：成田着 お疲れさまでした	朝：機 昼：機 夕：×

参加ご希望の方はご一報ください

詳細が決まり次第、資料をお送りします。

- ・ 今後の情報次第で、行程が大幅に変更になる場合があります。
- ・ コロナ禍で、「行こうと思えばいつでも行ける」という状況ではなくなったことを実感しました。「いつか行ってみたい」と思っている皆さん、この機会に一步踏み出してみませんか。
- ・ 「参加希望のご一報」をお待ちします。

TEL : 03-3268-4387
E-mail jvccp@rmail.plala.or.jp
IFCC(鎌田)

セニョリータのラ米★ウォッチ

CUBAPON ニュースを補完するツールとして、中南米を中心に「今、起きている」ホットなニュースをセニョリータ視点でピックアップし、メールでお届けしています。配信ご希望の方はこちらのアドレスにメールを送って下さい！

jvccpf@rmail.plala.or.jp

